

沖繩原住民に関する一仮説

——小浜島のアカマタ祭を手がかりとして——

本 位 田 重 美

一

この夏（一九七一年）台湾の、主として東海岸地方の調査旅行をしたが、その帰途十年ぶりに沖繩の先島諸島に立ち寄った。今回は与那国島まで足をのぼしたおかげで、さまざまな新しい知見を得ることができたが、その中で小浜島のニロー神祭の見学ができたことが最大の収穫であった。ニロー神というのは、通称アカマタ・クロマタの祭として知られているもので現在、では石垣島の宮良邑、西表島の古見・高那、小浜島、新城島等で行なわれているが、古見が発祥の地と言われ、ここではアカマタ・クロマタの外にシロマタも出現されるよしである、その大要は宮良賢貞氏⁽²⁾がすでに紹介して居られるし、また石垣島宮良邑・新城島その他での見聞記は本田安次・住谷一彦⁽⁴⁾・植松明石などの諸氏が書いて居られるので、ついて見られると幸いである。ただこの祭は、後にも述べるように、きわめて秘密裡に

行なわれるため、その紹介記事もおおむね簡略で、一般の人々に対してはなお十分な理解に達せしめることが困難なのではないかと思われる。それで、ここではまず、わたくし自身の見聞記から記し始めることにしようと思う。わずか兩三日の小浜島滞在では見学といっても範圍が狭く、理解の貧しさは隠すすべもないが、それは先学の研究を適宜援用させていただくことによって補ってゆくことにする。

昭和四十六年八月六日午前一〇時一五分石垣港発。宮良賢貞氏が見送りに来られ、たまたま同船していた宮良安彦・石垣博孝・安室孫秀の諸氏を紹介して下さる。それぞれ石垣市文化財調査委員会の若手の委員で、精力的な活動を続けて居られる方々であった。このたびの小浜島調査が、わたくしにとつてきわめて有意義なものとなったのも、ひとえにこれらの方々の援助の賜ものであったのである。一時三〇分小浜島着。日昇旅館に入り、夜の見学にそなえて休憩。午後五時ごろ、石垣・安室の兩氏に写真撮影・録音等一切禁止されている旨注意を受けた後、案内されて部落の北、ナビンドーの森の近くに出かける。ナビンドーというのはニロー神來臨の聖地で、「八重山語彙」⁽⁵⁾によれば、鍋の底のような凹所の義で、根の国底の国に通ずる所と信じられているという。ナビンドーの森からまっ直に一〇〇メートル足らず延びて丁字路となっている外側の畑の中に一〇脚ほど椅子が並べてあり、それに掛けて見学するようにと言われる。見ると、正面の道の森を出たあたりで、短い着物を着た青年二人がそれぞれ幟を持ち、同じ服装で棒を持った若者が一〇人ばかり、幟をかこんで歌い、踊っている。そのうち黄昏となり、森の右端あたりから十五夜の月が上ってきた。歌声が一段と高く熱っぽくなってきたかと思うと、突如、森の影からアカマタ・クロマタが現われた。熱狂した若者たちに取り巻かれながらゆらゆらとゆっくりこちらに近づいてくる。思ったよりも大きく、顔半分あまり人々の上に出ている。近づいてきたのを見ると、頭にはクバの葉がさしてあり大きな眼が月の光を受けて青白

く輝いていた。夜光貝か何かをはめこんであるのであろうか。頭の両側にさしてある線香の火がまことに印象的であった。

一団が丁字路の手前までくると、長老の人たちがわれわれを初め見物している人たちに立ち去るように促す。もとの道を引き返して、ニロー神が最初に訪問するという黒島家に行つて刺を通ずると、快く請じ入れられ、座敷で泡盛など御馳走になりながらいろいろな話をうかがう。黒島家は部落の総本家、いわゆるトゥニムトゥであつて、祭の前日⁽⁷⁾までニローの面が安置されているのだそうである。おいおい長老の方々も集まつて来られた午後八時ごろ、例の幟を持った若者と太鼓や棒を持った青年たちが唄を歌いながら庭に入つてきて踊り狂つている中にアカマタ・クロマタが現われる。薄暗い電燈の光ではよくわからないが、ほのかに漂つてくる匂いから推すと、からだ全体にまといつてあるものは、どうやら海岸などに生えている蔓草らしい。両手に短い棒を持ち、歌に合わせて拍子をとっている。やはり頭の線香の火が暗闇の中でふしぎな神秘さを感じさせる。幸運をもたらしってきた神の踊りは、ほんの数分にすぎなかったのであろうが、走るように立ち去つていった後は、緊張がほぐれて溜息の出るような感じであつた。

これからアカマタ・クロマタ⁽⁸⁾は定められた数軒の家々を順序に従つてまわつてゆき、その後はアカマタ・クロマタの各集団に別れて部落の各戸に幸運を授けて回るのだという。それをもう一度見るために安室・石垣両氏の泊っているMさんの家に出かける。まわつてゆく順序がわからないので、追っかけて歩くより、必ず来るはずの家で待つている方が賢明だという意見に従つたのである。Mさんにいろいろ話をうかがう。男の人が朝からナビンドーにこもり、女の人が弁当や水を運ぶということ、幟(旗)はアカマタの方が「天下泰平」、クロマタの方が「五穀豊稔」と染めてあること、旗持ちは中学三年または高校一年の少年が選ばれてつとめるということ、ナビンドーへの参加はもとは中

学三年からであったが、今は高校入試の関係で中学二年からになっているということ、またニロー神のさしている線香はまわってきた家の各戸で奉納の意味であげることなど聞かしてもらっているうちに、一時ごろであったろうか、幟・かかえ太鼓を伴った歌の一団が庭に入ってきた。声はもうかれているのに歌声はますます高い。続いてアカマタが入ってくる。歌のグループの立ち去ったあと、まったく忽然といった感じでクロマタが庭に現われ、二本の棒を打ち合わせて闇の中に消えていった。ここでは見物の人たちが少なかったので、比較的是っきりと見ることができた。前額部には冠のようにクバの葉が立て並べてあり、その横から両側に線香が二、三本ずつ突き出ている。目は青みを帯びた白銀色で口髭が生えている。鬼とか怪物とかいう感じではなく、やはり人間らしい顔容である。蔓草をまといつけたらしいからだは大きく、足も太い。手に持っている棒はカタナと称する木刀でアカマタは赤く、クロマタは黒く塗ってあるのだそうである。

午前一時ごろ、一時別れ別れになったアカマタとクロマタとが相会う儀式があるというので黒島家に見にゆく。こは見物の人でいっぱいである。祭に直接参加できるのは組織に入っている人に限られるので、参加資格のない子供や婦人たち、それにわれわれのようなよそ者の見学者などはすべて見物人として一箇所に集まるので、当然人数も多くなるのである。なおナビンドーへの参加者は、必ずしも男子に限られているというわけではないが、昔はこの部落出身でしかこの部落の主婦になった人でなければならなかったそうで、現在でも女性が参加するためにはかなりむずかしい制約があるようである。まもなく幟・かかえ太鼓・歌の集団が入ってきて熱気をはらんだ合唱が続くうちにアカマタ・クロマタが現われる。曲節は、ナビンドー以来ずっと同じであるが、歌詞はそれぞれ違っているようである。人の話を聞けば、ここでは相会った喜びを歌っているのだという。合唱する人たちの中に、服装はまったく同じ

だけでも、若い女性が数人まじっていた。アカマタとクロマタとが向い合い、旗や歌い手がその周囲で踊り狂っていたが、暗いのと見物の人の多いためによくは見えなかった。これから公民館の横の四つ辻に集団が全部集まって、神のナビンドーに帰られるのを送る行事があるというので、急いで宿に帰る。宿はちょうどその公民館の筋向いなのである。待つほどもなく、例の歌と踊りの集団が集まって合唱が始まる。もう声のかれてしまっている人が多いが、それでもアカマタ・クロマタが現われると、興奮した調子になって声の限りをふりしぼっているようである。集団はそのままゆるゆると北の方へ動いていって、部落のはずれで、名残を惜しんでいつまでも歌声が続いている。偶然にもその夜は皆既食であって、明け方近くあたりがまっ暗になり、いっそう神秘的な感じを深くした。

翌七日午前一〇時半ごろ、祭の幹事の方が迎えに来られ、集まりをやっているから見に来るようにとのことであった。急いで仕度をして連れて行っていただく。途中でくれぐれも撮影と録音とは禁止されている旨注意される。そのため、この集まりの名称や意味について聞くことができなかったのは、かえすがえすも残念なことであった。会場は部落の西北の、大きなフクギの樹に囲まれた広場で、見ると、東側に石積み塀があり、塀を背にして、一〇名あまりの幹部の方らしい人々が坐っている。地面にはずっと藁が敷きつめてあり、正面に向い合ってそれぞれ約四〇名くらいの人が三列の横隊を作って坐っている。各横隊間の距離は一・五〇メートルぐらいであろうか。服装はすべて黒い着物で、クバの葉の団扇を持っている。各列とも中央から正面に向って右半分は赤、左半分は紫色の鉢巻をし、みんな左前額のあたりでしめていた。わたくしどもは、正面の幹部の方々の左隣に、従って赤い鉢巻の人々と向い合って坐るように指示される。坐ると、前の赤鉢巻の方が形だけでも鉢巻をするようにと言われる。ハンカチを出してみたが、とても鉢巻にはならない。前の人々がそれを藁でつないで何とか頭にかぶれるようにしてくれる。この鉢巻が神事

に参列する者の資格を象徴するものであるらしい。そうすると、前の赤鉢巻の人々はアカマタに、紫鉢巻の人々はクロマタに属することを表わしているのであろう。なお、前に坐っている人々を見ると、最前列には年配の人が、第二列には壮年の人が、第三列には若い人々が席を占めている。さらに、正面に対して左側、すなわちわれわれの反対側の筵の上に一四、五人の少年たちがかしこまって坐っており、その後にそれと同数ぐらいの婦人たちがいる。前の人たちが「今年は大勢いるな」と話し合っているところを見ると、この少年たちは今年ナビンドー入りを許された連中なのであろう。列の間を数人の女の人が卵や菓子などを配って歩いている。クバの団扇で受け取るのが礼儀らしい。そのうちにわれわれの前にも盃が回ってきて、泡盛がなみなみとつがれる。やつのことで飲み終えたころ、長老の前の赤・紫のベアが立ち上って、手を前に伸ばし足ぶみしながら舞う。歌は赤と紫との掛け合い、ちょうどその後太鼓がいて拍子をとっている。続いてもう一組赤・紫のベアの舞が終ると、こんどは向うの少年組の中から二人出てきて、長老の前に坐り、拝礼して酒をついだ後、立ったり坐ったりして、歌舞をする。緊張して一所懸命にやっているけれども、どうも自信がなく頼りなさそうで、見ている列の人々の中から失笑の聲が聞える。集まりはこれで終りであった。多分これは、ナビンドーの新加入者の披露式なのであろう。

宿に帰って休憩していると、オーッオーッというような声が聞えてくる。外に出てみると、先ほどの黒い着物を着た人が二〇人前後一グループになり、日除に黒いこうもり傘をさして列を作って歩いている。一種異様な感じである。何をやっているのかわからないので、昨夜のMさんの家に聞きにゆく。御主人は留守で、奥さんに話をうかがう。奥さんのお話では、あれはドハンダニガイとい⁽⁴⁾って健康願いだそうであった。ナビンドーの会員は長老・壮年・若者など各階層によってそれぞれ役割が違うが、このドハンダニガイは、各階層の人がそれぞれ一団となって部落中

を回り、グループの各人の家で健康を願って歩くのだという。これは祭祀組織としてとらえられているようであるが、台湾のアミ族などに見られる年齢階梯制が残存していると見た方がよくわかるようである。

夕食後シネラハーマを見学するためにMさん宅訪問。Mさんに連れられて前本さんのお宅をたずね、お二人からシネラハーマについての説明をうかがう。これは俗に藁人形と言われているが、実は人が藁・笹をかぶったようなもので、夕方の四時ごろから作りはじめ、出来上ると部落会長・公民館々長・前本さん宅およびもう一軒の四軒の家々を回って、豊作を願うのだという。前本さんの宅にはシネラハーマに使う二本の旗を昔からあずかっているので来訪してくるのだということであった。八時すぎに出現。藁で胴を覆った上にクバ笹とクバの蓑をつけ、六尺棒を持った男が二人で、笠の上に稲か粟かの穂のようなものをつけている。縁先の庭に跪いて、その中の一人が祝詞のようなものを読み上げ、家の人の出した酒を飲み干すと、縁から座敷にはい上ってくるような所作をして終るのである。だが、これはどうやら石垣島川平のマングナシ(註)と同系のもののものである。その姿も、六尺棒を持っているという点も、二人でペアを組んでいることも、豊年を授けるということも、すべてマングナシと変りがない。ただ、マングナシは節祭、すなわち旧暦八・九月ごろに行なわれるのに対し、これはニロー神祭に付随する行事となっている点がちがっている。この両者は予祝祭という点で一致するので、おそらくシネラハーマは後から輸入され、ニロー祭の一環として組み込まれたものかと思われる。それでなければ、川平シタノシマではマングナシ(註)が各戸を回って予祝するのに、シネラハーマが部落の中でたった四戸しか訪れない理由を説明することができない。ニロー神の祭は今日が最後なので、名残を惜しんで人々は一二時まで祭の歌を歌い通すのがしきりになっているという。場所は昨夜のとおりの宿の側の十字路だということで、急いで帰る。来てみると、なるほど大勢の人が集まって熱っぽい調子で歌い踊って

いる。上の部落と下の部落とに別れて掛け合いで歌っているのだそうである。歌詞がわかればおもしろいのだろうが、わからないのが残念であった。一二時になると、世話役の合図で歌いながらだんだん両側に別れていった。祭は終わったのである。

註(1) 宮良賢貞「小浜島のニロー神」(昭和十五年「南島」一)「沖縄文化論叢、民俗篇1」所収。

(2) 同右論文。

(3) 本田安次「南島探訪記」五六ページ。

(4) 植松明石「八重山黒島と新城島における祭祀と親族」(昭和四〇年「沖縄の社会と宗教」・住谷一彦「西南諸島の Geleinkult」新城島のアカマタ・クロマタ覚え書)「昭和三九年」石田英一郎教授還暦記念論文集」所収。その外、宮良高弘「西表古見部落の豊年祭」アカマタ・シロマタ・クロマタ」(昭和三八年・八・六「沖縄タイムス」)など。

(5) 宮良当壮著、昭和五年東洋文庫刊。

(6) 岩崎卓爾「ひるぎの葉」によれば、宮良のこの祭は「月明ヲ忌」とある。おそらくニロー神の姿を人に見せないためであるが、小浜島では最初からそういうタブーはなかったものであろうか、それとも年月の経つうちに失われたのであろうか。

(7) 前掲宮良賢貞氏論文。

(8) 宮本演彦「南島村々の祭り」(「南島研究」第一五号)七ページ。

(9) 同右論文。

(10) 岩崎卓爾「ひるぎの葉」に「第三日、ぼうばな祝ヒトテ全字民老ヲ勞リ幼ヲ助ケ家族ト共ニ各自行厨ヲ携ヘ緑ナル草原ニ参集シ、林役葉ノ蓆ヲ敷キ蜜酒野肴ヲ獻酬、舞踏、歌舞シテ盛宴ヲ催フス。杯盤狼藉タルモ長幼序ヲ失ハズ、仇恩相忘レ、一種族ノ親ミ歎笑沸ク、天真爛漫情誼甚ダ濃カナリ。サレド他村ニ婚嫁シタル男女ハ宴席ニ就クコトヲ得ズト云フ」と見える。これは宮良のアカマタ祭について記したものであるが、この「ぼうばな祝ヒ」が現在のように変形したものであろうか。それとも、宮良のは小浜島から移されたものらしいから、わたくしの見た小浜のが原形なのであろうか。いずれにしても一見したところでは、やはり披露式または入会式と解するのがもっとも妥当なように思われた。なお、右の「ひるぎの一

葉」に「第三日」とあることについて簡単に説明すると、ニロー神祭は実は三日間続けられるのであって、第一日めはウガン・ブトゥキ（御願ほどき）と言って、豊年を感謝する祭が各御嶽で行なわれる。第二日めの夜はアカマタ・クロマタが出現し、家々に幸福を配って回る。そして第三日めは、午前に前記の「ぼうばな祝」、午後にドハンダニガイ、夜シネラハーマがあり、最後に掛け合いの歌の合唱があつて終るのである。すなわち、第一日めは豊作の感謝祭、第二・第三日めは予祝祭ということになる。なぜ感謝祭と予祝祭とが引き続いて行なわれるようになったのかわからないが、こうなるにはそれだけの理由があつたのであろう。ともかくわたくしの見たのはこの予祝祭の方だけだったのである。

(11) 「八重山語集」には、「ドゥー・バダ・ニンガイ」の項に「健康を祈ること（中略）胴肌願ひの儀」と見える。

(12) 前掲「南島採訪記」二四七ページそのほか。

(13) 前掲8「南島村々の祭り」一七ページ以下。

二

わずか二泊三日の滞在であつたが、この間に受けた感銘はひじょうに強烈であつた。見聞した個々の事象もさることながら、神に対する素朴で敬虔な心が村人全体の中に、深く流れているのを見て感動したのである。祭というものは本来こういうものであつたのだと初めて教えられたような気持であつた。だが、それとともに、この祭が沖繩の他の祭と較べてきわめて異質なものだという印象も拭うことができなかった。まず、そのような印象を簡条書にして左に掲げておこう。

- (1) この祭がきわめて秘密裡に行なわれるということ。
- (2) 沖繩の一般の祭とは違って男子によつて司祭されるということ。
- (3) 祭の参加者に年齢階梯制があり、その階梯によつてそれぞれ違った役割があるということ。

- (4) 祭に歌われる歌の旋律はだいたい一種類であるが、それが一般の沖繩歌謡とは異質なものであると感じられること。

まだこの外にはアカマタ・クロマタの仮装なども特殊なものとして注目されるところであるが、仮面をつけることは石垣島のミルク神⁽¹⁾などもそうであるし、仮装という点でも川平のマングナンのような例があるから、この点では異質なものとすることはできないであろう。また神が家々に幸運を配りあるくという点も変っているが、聞くところによれば、宮古島の狩俣のウヤガム祭⁽²⁾でも、ツカサが深夜村の家々の戸を楮で打たたき、各戸の悪霊を祓いのける儀式があるという。マングナシも各戸を訪れるというから、これもニロー神独特のものとすることはできないであろう。

まず(1)から迷べると、沖繩では祭に関しては多かれ少なかれ秘密に属する部分がある。例えば、前述の狩俣のウヤガム祭では、女司祭のサスと三〇余人のツカサと呼ばれる女性が旧暦九月下旬から十一月初めまで、部落の東北にあるウヤガムの森——ここに東の御嶽^{あがひ}と中の御嶽とがある——に籠るが、この森は常人の禁足所となっており、ツカサたちのその中の生活はほとんど何もわからない。さらにこのウヤガム祭は、狩俣の東の海上にある大神島^{うづげん}でも行なわれているが、これについてもほとんど知られていない。その外にも、何らかの秘密の部分を持つ祭は数々あるが、このニロー神祭はそれらとも違った面があるようである。われわれが小浜島で撮影や録音をくれぐれもさしとめられたことは前述したとおりであるが、聞くところによると、石垣島の宮良でも、例えば祭の当日も宮良の人々は平常どおり石垣に勤めに出ており、社長や上役から祭の日取りをたずねられても「知りません」とか「まだでしょう」とか答えて、決して漏らすことはないという。しかし、宮良は石垣から白保に通ずる幹線道路の途中にある部落なので、

祭の日ともなれば自然それとわかるのであるが、そのころになると棒を持った若者たちが部落の入り口をかため、へだたにカメラや三脚などを持ってゆけばたきこわしかねまじい形相で見張っているそうである。そういえば、小浜島でもニロー神の回ってくる前に何人かの長老の人が家に上りこんで酒などを飲んでゐるが、これも撮影や録音などされるのをそれとなく見張っているのではないかと思われるふしがある。部外者に対しこんなまで警戒をして秘密保持にとめなければならぬのはどういうわけであろうか。一般に言われるような、神を神聖視し、その祟りをおそれるとか、旅行者が神の怒りを買うような不慮の事故をおこすことを警戒して神の近くへ寄せつけないのだとかという理由だけでは説明しきれないものがあるように思われる。

次に(2)について述べる。小浜島にももちろん各地と同じように御嶽^{みづたけ}⁽⁴⁾がある。御嶽は五つあり、それぞれにツカサ(ツカサ)と呼ばれる女性最高司祭者、バクスという女性の補助司祭者、およびチンチビという男性の補助者が各一名ずつおり、さまざまな宗教儀礼を行なっているが、ニロー神祭に関しては、男性の指導者が万事を取りしきり、女性はや当や湯茶・酒等を運ぶいわば脇役としてしか参加しないのである。もともと、われわれはナビンドーの森に入つて実際を見ることができないのであるから、最高の司祭者がはたして男性なのかどうか、知るよしもないのであるが、三日めの披露式でも万事男性がとりしきっていたことであるし、全体の状況から考えて、そう考えておいてよさそうである。ということは、ニロー神祭は、八重山地方でもっとも盛大な祭事とされる稲穂^{いねほ}祭⁽⁵⁾を初めとするさまざまな宗教儀礼とはまったく異なつた行事であることを端的に示すものであると思われる。重いニロー神の扮装をして暗闇の中を駆けあるかなければならないからだ、というような説明は本末を顛倒したものであろう。

(3)の年齢階梯制は、本土でも中部以西の、ことに漁村地区に多く残っている。瀬戸内地方を初め名地に多く残つて

いる若者宿もその遺物であろう。ところが、沖縄では血縁家系による門中制度、御嶽信仰による氏子到度などは発達しているけれども、年齢階梯制については寡聞にして存在することを知らない。ただ、このニロー神祭に際してナビンドー入りを許されるのは、宮良賢貞氏⁽⁶⁾によれば、一五歳（現在では中学二年）に達し、しかも模範青年でなければならぬ。また、いったん入会しても不正不良の行為があれば除名され、その後改悛の実があがったと村人に認められた時、再入会の資格が与えられるという。祭の五日前の晩、午後九時ごろから午前二時ごろまでナビンドーにおいて長老会議が行なわれ、今年入会の有資格者ならびに再入会者の選考がある。合格者は五日後の祭に参加できるが、その時もナビンドーに行きつくまでには先輩たちからさまざまな試練を受けなければならないと言われる。その後長老になるまでいくつの段階があるのか明らかでないが、祭の日ニローになる船頭^{いもと}、旗持をつとめる脇船頭、鼓持をつとめる鼓船頭など体力を必要とする若者組があるに違いないし、あの第三日め披露式に三列横隊に並んで坐っていたのもたぶん年齢階梯の序列に従ったものである。午後のドハンドニガイに二〇人前後で歌いながら歩いていった人たちも、見たところほぼ同年配のグループであった。そうして、これらのグループがそれぞれ別の役割を持っているとすれば、少なくともここに年齢階梯が存在すると考えてよいのではなからうか。しかし、これが真の年齢階梯制なのか、それとも未開社会にしばしば見られる男子結社なのか、判断に苦しむものがある。年齢階梯制社会では、一定年齢に達すれば誰でもこれに加入できるのであるに對し、男子結社では、入会にあたって厳しい試練を伴う一連の儀式があり、宗教的呪術的で、例えばゴーストダンスと言われる仮面をかぶり身体をおおい隠して踊る儀礼があるという。こういう点から見ると男子結社に近いようであるが、一方、男子結社は女性排除が大きな特徴であり、また金品を供出すれば年齢にかかわりなく階級が進むので必ずしも階層の構成が年齢の順序によらないと言われるが、ここで

は女性も正式に入会できるのであって、最高の指導者にはなれないとしても、必ずしも女性を排除しているとは思われない。また前述のように階層の構成も年齢の順序に従っているように見える。民族学ではこの二つの制度は峻別されるべきものと考えられているので、どちらかに決めなければならぬとすれば、わたくしは、やはりこれは年齢階梯制⁽⁶⁾で、本来は闘争・政治・祭儀等すべてを通じて機能していたものが、社会制度の変化により今は祭儀の場合にだけ残されたものと考えたい。とすれば、これは沖縄では珍しい祭儀形態であって、他の祭とはまったく異質なものということになる。

最後にニロー神祭に歌われる歌であるが。ドハンダニガイの歌とシネラハーマの祝詞を除くと、他はすべて同一旋律の歌⁽⁷⁾であって、歌詞を別とすれば、ずっと同じ歌ばかりを聞いていたので、しまいにはついて歌えるようになってしまった。ところが、この旋律は、わたくしの今までに聞いた沖縄民謡、先島のアヤグ・ユンタ⁽⁸⁾・ジラバ⁽⁹⁾などとはかなり違っている。どうもこれは沖縄の歌ではない、と思われてならなかった。祭の歌だから違うのかとも思ったが、かつて聞いた水納島・竹富島・石垣島の白保などの祭の歌とも似ていないように感じられた。むしろ先ごろ台湾で聞いたアミ族の歌⁽¹⁰⁾にひじょうに近いのではないか、そう思われてならなかった。

註(1) 弥勤神。黄色い着物をつけ、右手に軍配、左手に杖と瓢を持つ。穗利祭に出現する。本田安次「南島採訪記」(前出)参照。

(2) 前掲「南島採訪記」。そのほか。

(3) 宮本演彦「南島村々の祭り」(前出)。

(4) 村武精一「八重山・小浜島の聖域(WANN)祭祀」(「沖縄の宗教と社会」所収)。

(5) 宮良賢貞「小浜島のニロー神」(前出)。

- (6) 住谷氏はこれを男子結社と見て居られるようである（前掲論文）。
 - (7) 前出の「南島村々の祭り」には小浜島のニロー神祭の歌の歌詞が約四〇首載っている。
 - (8) 「アヤグ」は宮古島の歌謡で、「綾語」の転であろうと言われる。長篇の英雄叙事詩と比較的短い民謡風のものがある。
 - (9) 八重山では「アヨウ」と言われ、祈願に際して歌われることが多い。
 - (10) 「ユンタ」は読み歌であろう。心の思いを歌によんだもの。
 - (11) 「ジラバ」は、歌詞は違っているが、歌い方は一定したジラバ調で、軽快である。八重山の「アヨウ」「ユンタ」「ジラバ」は広義の労働歌と見られる。喜舎場永珣「八重山古謡」参照。
- (11) 台湾東海岸、花蓮県から台東県にかけて分布する高砂族の一派。主として農耕民で、人口も高砂族中もっとも多く、文化程度も高い。

三

小浜島のニロー神祭の歌がアミ族のに似ているのではないかと思いついた時から、わたくしの心の中には沖縄とアミ族との関係が去来し始めた。思えばアミ族にも年齢階梯制がある。古野清人氏の調査によれば、アミ族の年齢階梯は各蕃社によって相違があり、だいたい九乃至二〇、時としてはそれ以上に細分されるが、大別すればカップ（若者）とマトアサイ（老蕃）との二つになる。時には太巴塹社^(a)のようにカップとマトアサイとの間にピピ克蘭（中老蕃）を置くところもある。またこの外に社の正式メンバーになる前の階層。すなわちワワ（子供）およびマミスラルとかバカルガイとか呼ばれる未成年組とがあり、彼らが若者組に入るにあたっては、まず集会所に入って、先輩の使走りを初め、焚火・掃除・水汲み等の苦行に服さなければならなかったし、時には断食したり、苛酷なマラソン競争で人におくれをとらないようにしなければならなかったという。もしその苦行を十分に積まなければ、入会を許さ

れないこともあったのである。このように入会のための選考を受けることや、その選考がイリシン（粟祭）の前に行なわれるということも、ニロー神祭の場合に似ているようである。そうして、このような社会階梯はパイワン・ルカイ・ツォウなどの諸族にも痕跡をとどめているが、アミ族ほど明瞭な形をとどめているものは外にないのである。

次にアミ族の祭祀は数々あったらしいが、台東県竹湖で聞いたところでは、今日なお行なわれているのは次の四つである。

1 マサウマー 粟の播種祭で二月に行なわれる。この日は一日中水を呑んではならないのだという。

2 ミサリシン 海の祝で四月に行なわれる。漁が始まる前に海に向って餅・肉類などを供え海神を祭るのである。この祭には女性は参加させない。

3 イリシン 豊年祭で七月中旬に行なわれる。

4 マサオポ これは本来「みんなが集まる」という意味の語で、マサオポ・クマアン・ト・ウパハ（酒宴）を略していったものであろう。年末の祝だというが、予祝祭の意味をこめたものと思われる。全員自宅におり、各家の年長者を呼んで酒を飲み、終ると次々の家を回ってゆくのだという。十一月に行なわれる。

これは竹湖だけの例で各社それぞれ多少の相違はあるであろうが、これらを通じて、祭の司祭をつとめるのは、一つにはカキタアンすなわち社の頭目である。このことはこの語がまた司祭という意味に用いられることが多いことから察せられる。また一つにはアミ族南勢蕃の⁽⁴⁾荳蘭社・里漏社のように特定の公的儀礼をつかさどる家柄のあるところもある。カキタアンが女性の場合も稀にはあるようであるが、一般には男性であるから、原則としては、祭祀は

すべて男性によって司られると言つてよいであろう。この点でもニロー神祭は、沖繩の他の祭よりはアミ族のそれに近いわけである。

次にニロー神祭の歌であるが、本土に帰ってから、音楽学を専攻している関西学院大学助手の畑道也君に、花蓮のアミ文化村および台東県東河・竹湖・真柄^{まからばい}海などで録音してきたアミ族の歌と、宮古・石垣・与那国などの歌のテープを提供し、わたくしの覚えてきたニロー神祭の歌とを比較分析してもらつた。その結果はだいたい次のとおりである。

沖繩音楽の音階は、大別すると、

- (イ) 固有型 (ドー・ミー・ファー・ソー・シ・ドの基本旋法に基づくもの)
- (ロ) 中国型 (ドー・レー・ミー・ソー・ラー・ドの基本旋法に基づくもの)
- (ハ) 日本型

の三種になるが、ニロー神祭の歌の音階はやはり沖繩の固有型に合致する。上行の際にはドファとソドを中心として、それにミとシがつけ加えられ、下行の際にはレ・フラットがつけ加えられて旋律全体が転位することがある。しかし、民族音楽においては、最切から音階が意識されて曲が生まれたはずはない。音階は、後になって、それまでのさまざまな旋律型が整理されたものにすぎないのである。従つて民族音楽では、既成の音階によって型をきめてしまうことは不適当で、むしろそれぞれの旋律の特徴を形成する旋律型を中心に分析すべきであると思われるのである。ニロー神祭の歌は、ちよつと聞いたところでは沖繩固有型の音階を持っているように受け取られるが、実は五度の音域でまとめられた独立した旋律型(以下音配列と呼ぶ)を中に含み、それを基礎に歌の旋律ができてゐる。ところ

で、このニロー神祭の歌の旋律は短い経過句をはさんで、前後二つの部分に分けられる。ここでは、前半の旋律の基

礎になる音配列を「A」、後半の基礎になっている音配列を「B」と呼ぶことにしよう。

そうするとニロー神祭の歌は、この二つの音配列がさまざまに拡大されて、沖縄風の音階をとるに至ったと考えられるのである。次に、アミ文化村ならびに台東県各地の豊年祭で録音した歌のうち、豊年舞・祭神舞・打獵舞・大家来跳舞などが伝来の古いものであると言われているが、これらの曲を前述の音配列型で分析すると、

豊年舞 音配列「A」「B」が繰り返して現われて曲の基調を作っている。

祭神舞 音配列「B」を含む旋律の繰り返しによって全体が成り立っている。ただし、実際にはミ・レ・ド・ラと下向する形であって、音配列「B」に比べるとドの音に半音の差があるが、これは同じ音の地域差として解釈できる

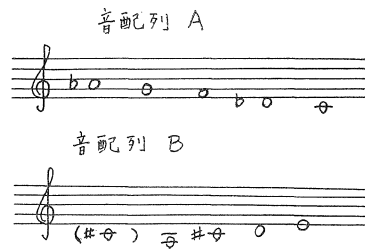
のではなからうか。

打獵舞 幾度も繰り返される旋律の最切の部分は、すべて音配列「A」である。この下降する音配列「A」は、

アミ族の音楽にみられる一般的なパターンであると考えられる。

大家来跳舞 これは特に注目すべきもので、音配列「A」と「B」との交替によって、旋律の全体が構成されている。

ということになる。要するに、アミ族の伝統的な歌謡においては音配列「A」「B」が旋律の中に含まれることが多い、ニロー神祭の歌と根元的に無関係ではないと思われる、というのが畑助手の分析の結果であった。



以上によって、ニロー神祭は多くの点においてアミ族的要素を感じさせるのであるが、あの、祭に際しての極端な秘密保持はどのように解釈すればよいのであろうか、祭が終れば、その歌を口ずさむことさえ憚るというのである。アミ族の祭祀においてはこのような秘密が存在しているとはとうてい思われなかったが、それでもこの両者に何らかの関係があると思われるべきであらうか。それとも単なる偶然の一致なのであろうか。

註(1) 古野清人「高砂族の祭儀生活」(昭和二〇年三省堂出版) 特に「七、高砂族の年齢階級と集会所」。

(2) タバロン。花蓮県鳳林庄。

(3) 花蓮県北部平地に分布するアミ族の一派。荳蘭社・里漏社は花蓮市の西。

(4) これは、豊年祭の後で部落の男女が集まり熱狂的な歌舞が行なわれるが、その時に歌われるものだという。そうすると、アマタ祭とはほぼ同じ条件のもとで歌われるものであろう。両者の似ているのも当然のことと言える。

四

これまでわたくしは、アミ族と沖縄とがいかにも何かつながりありげに書いてきた。わたくしにとって、それは実は以前から胸にくすぶり続けている問題で、今度台湾に出かけたのもこの点に何らかの示唆が得られないだろうかというのがそのきっかけであったのである。具体的に言うと、古代の西日本に、歴史家のアマ族と呼んでいる漁撈民が住んでいたこと、九州の南に奄美諸島^{あまみ}があること、沖縄の始祖伝説⁽⁴⁾ではアマミキヨ・シネリキヨの二神が久高島に降臨し、沖縄人の祖先となったといわれていること、これらのアマあるいはアマミという名称が、アミ(アミス)族のアミと何らかの関係があるのではなからうか。アミスというのは「北」という意味である。高砂諸族から見て北方に

いる部族という意味だとしても、それは必ずしも台湾の島の中だけのことはかぎるまい。沖縄、さらに日本本土まで含めての名称であることもありうるのではなからうか。それから沖縄全域で尊崇されている太陽神ティダガナシのティダもアミ族の神であるチダル（太陽神）と関係があるのかもしれない。宮古島の池間・狩俣地方や八重山地方ではrの音の脱落する傾向がある。たとえばアガリ（東）・イリ（西）は上記の地方ではアガイ・イーとなるのである。また、小浜島の南に黒島という島があり、現地ではフーシマと呼ばれている。これは、この島ではkがhに変る傾向があり、さらにrが脱落するので、クル（黒）がフーとなるわけである。さて、このような、一つや二つの語が似ているからといって、全面的に両者を関係づけることは、慎まなければならないことは言うまでもないが、それが外のものではなく、沖縄・アミ族ともに尊崇されている神名であるという点で看過できないことだと思っていたのである。

さて、このへんでわたくしの仮説を述べてゆくことにしよう。かつて西日本の海岸地域から南西諸島全域にアミ族またはこれと同系統の種族が住んでいた。そこへ朝鮮半島を経由してアルタイ系民族が南下してきた。それはやはり弥生時代初期のことであろうか。侵入してきた民族の主勢力は九州から中国・四国を経て近畿地方に進攻したが、その際原住民は外に逃げ場もないことであるし、征服され、結局は混血、消滅してしまったろうと考えられる。これについては、外にも種々考究しなければならないことが多いが、当面の問題ではないので、いちおう伏せておくことにしよう。一方侵入民族の一部は九州から南西諸島を次第に南下していった。原住民はこれに圧迫されて、次第に島伝いに後退していったが、その間に一部は抵抗して殺戮を受け、一部は降伏して侵入者と混血同化していったであろう。

九州南部から南西諸島にかけてoがuに、eがiに吸収される傾向が強いが、これはフィリッピンから台湾・沖縄

にかけて一般的に見られる特徴である。ところが、八世紀ごろの南九州にすでにその徴候が見える。すなわち、大隅風土記の逸文に、

必至里、昔者此村之中在海之洲、因曰必至里、海中洲者、隼人俗語云必至。

と見え、この「必至」は古代日本語のハ行頭音がP音であったから、「ピシ」とよんだであろう。その *pi:si* という語なら現在でも先島諸島で生きており、一般に「干瀬」という文字を当てるべきものと考えられている。もしこれが正しいなら、当時すでに *e* が *i* に吸収されているわけであって、俗に三母音と称せられる沖縄方言の特徴は八世紀ごろにもう完成していたことになる。朝鮮半島から南下してきたアルタイ系民族の言語は八母音で母音調和の習慣を持っていたと考えられているが、もしそうなら、僅々七、八〇〇年のうちにその特徴が失われて五母音になり、さらに南方系三母音の母音体系に吸収同化してしまったことになる。ということは、南下侵入してきた人の数に比べて、被征服者であった原住民の数が圧倒的に多く、しかも平和的に共存化することが多かったことを示すものである。つまり、南下の方法は一挙に攻略を進めたものではなく、混血同化しては南下し、また同化しては南下するというように徐々に時をかけ、地歩をかためながら行なわれたものと思われる。

しかし、原住民の全部が全部同化されていったわけではあるまい。屈従をいさぎよしとしなかった人々は、最後には与那国島・波照間島あたりから、さらに西の台湾東岸に逃れていったのではなからうか。台湾から与那国島は見えないけれども、与那国からは、空の澄んでいる日には台湾が見えるのである。アミ族南勢蕃の始祖伝説に、昔、大洪水があつて全社ほとんど絶滅したが、その時粟を搗いていた兄妹が臼に乗って逃げて、あやうく生きながらえ、後に夫婦となった、その子孫が今のアミ族であるという。また、里漏社⁽⁶⁾ではその祖先は独木舟に乗ってここに漂着したと

伝えられており、五年に一度バライサン島に向い供物を整えて祭祀を行なうと伝えられている。これらは祖先が少数ずつここに漂着してきたという遠い記憶が變形して残っているのだと考えることもできないことではない。

大部分の先住民は以上のような経過をたどって沖繩から姿を消していったのであろうが、中には逃げおくれ侵入者の目のとどかない山中に身を隠して民族固有の伝統をひそかに守り続けた若干の人々があつたということも想像できないことではない。その場所としては西表島の山中などもっとも可能性があるであろう。ニロー神祭が、その人たちの守り続けた祭の伝統を受け継いだものと仮定するなら、それがきわめて秘密裡に行なわれることも理解できよう。

アミ族の重要な祭神の一つにマラタウ神⁽⁶⁾がある。軍神で常に西方に居り、その形は人間よりやや小さく、人間のようにその数が多い。豚を好んで魚や蔬菜を好まないとされている。出草（首狩）の時は必ずこれを祭り、成功すれば関係者より一頭ずつ豚を出してこの神を祭るが、その踊は勇壮活潑で、神はこれを見て満足し、五穀を成熟させるのだという。前述のチダル神の場合に説明したように、先島では Γ の脱落するところが多いから、ここでも Γ が脱落したとすれば、マラタウ \downarrow マアタウ \downarrow マーター \downarrow マタと転化してゆくはずであるから、アカマタ・クロマタは、このマラタウ神だと考えてよいのではなからうか。踊の勇壮なことも、五穀の豊穰を願うことも、すべて一致していると思われるのである。

こういう仮説を立てるということは、何も現在西表島や小浜・新城などに住んでいる人々がアミ族の後裔だと言っているわけではない。現在の沖繩の人々は完全に混血融合して新しい民族ができているし、その点では本土も同じで、同じ二つの民族の融合による混血民族だと言ってよいと思う。それから、このような仮説はあまりにも大胆すぎ⁽⁷⁾

るという難もまぬがれ得ないであろう。しかし、たとえそれが遠からず崩れるものであっても、誰かがこのような仮説を立てなければなるまい。それが学問の進歩の一つの段階なのであるから。

註(1) 「球陽」巻一。僧袋中「琉球神道記」。

(2) 「蕃族調査報告書」阿美族奇密社三三三ページ。

(3) 服部四郎博士は、言語年代学による研究で、沖繩首里方言と京都方言との分離は一四五〇年——一七〇〇年と見ておられるという(大野晋「日本語の起源」二〇六ページ。昭和三二年岩波書店)。そうすればだいたい四五〇年くらいの間にこれだけの變化を起したことになる。

(4) 「蕃族調査報告書」阿眉族南勢蕃。

(5) 「蕃族慣習調査報告書」第二卷二一ページ。

(6) 「蕃族調査報告書」阿眉族南勢蕃。チダル神やマラタウ神は主としてアミ族で祭られる神で、他の高砂諸族ではあまり祭られていないようである。その点からも沖繩先住民はアミ族と同系であったのではないかと考えてよいことになる。なお、アミ語の「チダル」を沖繩の「ティダ」と結びつける説は早く坪井九馬三氏(「わが国民国語の曙」所収「倭人者」)「大古人民のくらし」・安藤正次氏(「古典と古語」所収「登叱流・血垂考」)等によって主張されているが、これに対して亀井孝氏は日本語の「天道」の転じたものと論じられている(「山田孝雄追悼史学語学論集」所収「ティダの語源」)。しかし、わたしはマラタウとの関係からやはりアミ語と関係づけて考えたい。

(7) 北里闌博士は日本語の音韻はタガログ語と同じく、語の構成は朝鮮語と同じだと論じておられる。(「日本古代語音韻組織考」)アミ語も言語としてはタガログ語の一派なのである。